
復讐

ボロズ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

復讐

【Nコード】

N7792N

【作者名】

ボロズ

【あらすじ】

10年前の隠された事件。

それが多くの人を巻き込む大事件の発端を担うとはだれも思わなかった。

利権、名声、愛情、そして憎しみが人を動かす。

悪の芽（前書き）

このような作品を書くのは初めてですが

温かい目で見守ってほしいと思います。

悪の芽

あれから幾年たっただろうか…。

はるか遠い昔のような気もするが、昨日のような気もする。

1人の青年が歩いていた。

彼の名前は木田正文。

彼は端正な顔立ちをしており、スマートな体系といえるだろう。本来は街でナンパをされてもおかしくないのだが、彼に話しかける人は皆無だ。目を見ればわかる。だれにも屈しないような意志のこもった目と彼の雰囲気から出るオーラが皆を遠ざけている。

彼は人を探しているようだ。あたりは真っ暗なため人を探すには一苦労だが、反対にいろいろな人が行き勝っても気づかれることはあまりない。場所はもちろん、東京の銀座。多くの人が行きかう中、1人の男が彼に近づいてきた。その風貌はほとんどの人が盗人とか詐欺師というようなインチキくさい男である。しかし、その男もまたカッコ良かった。

彼らは全く話をせずにすれ違いざまに手紙を渡したただけだ。普通の人から見れば単純にすれ違っただけにしか見えず、彼らが普通でな

いことを表していた。

木田はその手紙をその場で開いた。
書いてあった言葉はこうだ。

『いつものところで……。ついに探り当てた。犯人の名前が分かった。

』

木田の顔に自然と広がった。しかし、その顔は笑っているという顔ではなく、肉食動物が獲物を見つけたような顔をしていた。彼の周りの人たちは寒気がしたのか、彼を避けて通っていた。その彼を見つめている人がいた。

彼は街中を歩いていた。しかし、その後ろには先ほどの見つめていた人が彼をつけていた。彼はそれに気付いたのかわざと人が多いところを歩いている。つけられるということに慣れているようだった。もちろん、つけているその人も慣れているようであったが……。気づけれたと悟ったその人は携帯で連絡をして尾行をあきらめたようだ。深追いはしない。これが尾行の鉄則ではあるが、それを実践する人は少ない。なぜかというともっと知りたいと思うからだ。それによつて証拠も上げられるし、何より何をしているかが分かり、他につながりを見つけれられるかもしれないからだ。たいていは大物が犯罪をしている場合は下っ端が動くものだ。それを調べるのが普通だが、木田にそれほどの実力があるかどうかは分からないが……。

彼がついたところは離れにあるバーや居酒屋などではなく普通の家だった。しかし、もう夜9時なのに明かりが全くついていない。明

らかに気味の悪い家とまでは行かないが、普通はこんな家には入らないと思う。だが、彼はそんなことは気にすることなく入っていた。もちろん鍵は持っていたようだ。

入っただけで木田は電気をつけてマネキンを動かした。そして、テレビをつけてマネキンを椅子に座らせた。彼は地面を這いつくばり、匍匐前進を開始した。トイレに近づいてその横にある壁を触り始めた。暗証番号を入れるスイッチが壁の中に隠されていた。そこに番号を入れると廊下が開き、地下への階段があらわれた。かばんの中から懐中電灯を取り出し、彼はその階段をおり始めた。

降りるとドアがありそこにも暗証番号を入れなくてはならなかった。そこにはすれ違いざまに手紙を渡したその男がいた。

「よう、正文。つけられてないか？」

「いや、少しつけられたが引いたようだ。」

「ふむ、それはあまり良いことではない。今までとはちょっと違うようだ。気をつけよう。」

「そこまで気にすることはないんじゃないか？ 帰っただろう？」

「お前は甘いよ。常に最善を目指す。それが作戦だ。そのためには最悪の想定をしてことを進める。そう教えただろう。今度から常に気を張っておけ。余力があれば写メを取れ。」

「そうだな。分かった。そっちは何か分かったか？」

「…。10年の前の犯人の可能性があるのはこいつだ。上村正義。

役職は…。」

「どうした？」

「警察庁長官。」

「!!!!!!!!!!」

「ここまでとは思わなかった。俺も何度も調べた。しかし、この情報はある。信用できるし、つじつまもあっている。正文、少し作戦を変更しよう。あまりに大きすぎる。同士も少ない。警察の危険因子とも接触できるまでことは進んでいる。遅らせても何の支障もない。」

「……それはできない。ここまでずいぶん待ったんだ。ようやく、ようやく相手を追いつめるとここまで来て、いまさら引けるか。」

「……………」

2人はしばし、見つめあった。この様子からみても彼らはずいぶんと長く知り合いだということができるだろう。しかし、2人の思いの違いがある。それは話の内容から見ても分かるだろう。正文は自分で行動する癖があるようだ。他人を信じないわけではないが、自分でやりたいようだ。対して、木村隆正はある組織にいるようだ。かなりの地位にいて、部下がいる。この2人がどのようにであったかは分からないが、過去に何かあったのだろう。それぐらいは予想ができる。

「…何かあったのか？」

「病気があった。癌だ。あと半年らしい。」

「本当なのか？」

「ああ。仕方ない。」

「……。嘘ではないようだ。分かった。3か月でことを起こすことにしよう。先方にも伝えておく。」

「すまない。じゃあ、また3日後に会おう。」

「どこに行く？」

「やることあるんだ。」

彼は少し外れた道を歩いていた。今までとは違う裏の人が歩くような通りのようだ。電柱には新宿と書いてある。少し歩くと「眼」と書かれた店があった。店内は明るいというわけではなく薄暗い。頭に大きな傷を作っている人がいた。見たらそっち系の人だとすぐわかる。

「久しぶりだな。親父、元気になっていたか？」

「おう、久しぶりじゃのう、正文。最近いろいろ物騒になってきているのう。お前は何か知らんか？ここにも警察が来たんじゃないが？」

「おそらく俺を調べているのだらう。隆正は元気か？」

「元気だよ。俺もそろそろ行くことになりそうだからな。あいつには無理をかける。」

「…お前も別の生き方があったらうに…。親子そろって早く逝くこともなからう。今ならまだ間に合う。考え直さんか？お前の親父さんもそりゃ、仇は討ちたいだらうがお前をそんな風には…。」

「もういい。物を用意してくれ。」

「頑固なところは似ておるのう。難儀な…。ちよつとまつとれ。」

そこから取り出したのは紛れもなく銃であった。

「これは親父さんが持っていた物。警察の奴をやった時にとったものじゃ。」

「分かった。今まで世話になった。」

「本当に行くのか？」

「ああ、これが俺の選んだ道だからな。」

「じゃあ、これを持っていけ。」

彼がとりだしたのは刀だった。おそらくキレ味は悪いだろう。いかに裏取引でもそう簡単に刀などは手に入りはしない。飾るために作られた刀だ。

「これは荷物になる。」

「隆正に渡すんじや。奴なら使い方を間違えんはずじや。」

「……分かった。」

「それじゃあもう。」

「見失いました。ええ、正文です。彼が「眼」から出てきたのを見まして……。もしかしたら、銃を持っているかもしれません。はい？ いや、確認はしていませんし、いきなり検問などできませんよ。一応、ここら辺を搜索してみます。何か分かるかもしれません。では。」

「カチッ」

冷や汗が止まらない。気配が全くなかった。尾行はもう何十回もやっている。こんな経験はかつてない。自分の第6感が一番危険だと伝えていた。しかし、頭は冷静であった。

「木田正文か？」

「そうだ。今日の尾行はお前のようだな。あそこまでつけられたのは初めてだ。なかなかやるようだ。しかし、そう時間もないから手

っ取り早く聞くことにしよう。」

「一体何のことだ？」

「俺の父と妹のことだ。2人を殺したのは誰だ？」

「何を言っている？お前が父を殺したんだろうが！だから今こうしてお前を追っていた。普通に学校に行っていたことには驚いたが…。」

「

「そんなわけないだろ。もしそうだったら頭を打ちぬいた銃弾はどう説明する？俺はあの時7歳だった。警察官から銃を奪うのは少し難しいはずだ。奇襲ならともかく警戒している相手から奪うのは難しい。」

「言っていることはつじつまが合うが…始めが違う。」

「始め？」

「お前がピストルを奪ってから父を殺したということになっている。というかそれが真実だ。今のお前がいったことは間違いだ。俺は貴様の資料をすべて読んでいる。」

「俺を追っているのはお前だけか？」

「……………」

「いわないか。さすがに根っからの警察官だな。すまないが、携帯をもらっ。銃もな。」

「よし。そのまま、警察のほうに帰りな。」

「いいのか。俺を殺さなくて。」

「ああ、殺すぐらいなら初めからやってたさ。じゃあな。」

山岸は警察に帰った。尾行もばれ殺されかけたし、銃も奪われたら帰るしかなかった。携帯もとられたので連絡もできない。だが、まずはおかえって資料の確認をしたかった。彼から出た言葉は信用に足

るものではないが、改変されたり偽造されたのであればすぐにわかる。確かに彼のことは調べてはいたが、10年前の事件よりも最近盗まれたとされている銃のほうに重点を置いていたのだ。

「さて、この量を読むのはしんどいが、頑張らないとな。」

午後11時。だいぶ読み進めたように思うが、肝心な所にはまだ届いていない。今のところ矛盾がないはずなんだが…どこかおかしいまず、いきなり正文が出てくる。時系列に書く資料としてはありえないことだ。その前後がないということが…、うーん…。

「おう、頑張っているな。山岸。」

「ええ、藤井先輩。こんな遅くにどうしたんですか？」

「首都高で追突事故があつてな。その資料を書いていたんだ。」

「そうですか。お疲れ様です。」

「お前もこんな遅くまで一体何を調べている？」

「木田です。」

「そうか、そう遅くならないようにしろよ。」

「はい。」

何だこれは？もしこれが本当ならば犯人が違う。資料はおそらくあそこにあるはず…。

そう思った山岸は秘密資料室に急いだ。

「これだ。この記録が正しければ…。」

「犯人が変わるな。山岸、お前はここまで来るべきではなかった…。
残念だ…。」

「えっ…。」

山岸の意識は闇の中へ消えていった。

悪の芽（後書き）

どうでしたか？

初めてですので

時間がかかってしまいました。

長くはないつもりですので

気軽に読んでいただきたいと思います。

始動

山岸の遺体が発見されたのは1週間後のことであった。後ろからの打撲以外に外傷は見られず、毒殺と考えられている。発見場所は樹海であった。もちろんのこと、警察は他殺とは発表せず、自殺と発表した。それは警察庁内で彼の血痕が発見されたためである。このことで木田正文には極秘に殺人容疑がかけられている。単純に彼の調査によって命を落としたからでもあるが、大きな点は銃が紛失していたことにある。もし、内部に殺人者がいるとしたら銃を持ち逃げするとは思えないからである。そして鑑識によって彼の携帯から木田正文の指紋が検出された。この3点が決め手になったわけである。

2010年7月18日

警察庁で、ある会議が開かれていた。

「これより木田正文逮捕の極秘任務の会議を行います。まず、お手元の資料をお開きください。木田正文。年齢18歳。今年、二田正文と名前を偽り、高校を卒業。その後足取りがつかめなくなっています。彼は10年前の父親殺害事件で指名手配されています。殺害したのは父親のほかに、当時同級生だった石川奈々をレイプした後、に殺害したものと考えられています。」

「高校を卒業するまで彼だと分からなかったのか？」

歯ざしりしながら答えた。

「…はい。苗字が変わっている上に彼は中学卒業の証明書を持っていたそうです。」

「これだから下っ端は…。もう少しちゃんとしろ。今回の事件が起

きてからでは遅いだろう。怪しいと思った奴は職質でも任意同行でもなんでもしろ。」

「彼は今、銃を1つ所持しています。複数人で調査するのが妥当だと考えています。現在彼の通った小学校、高校の聞き込み調査をしています。彼は礼儀正しく、授業にも真面目に出て成績も良かったそうです。聞き込み調査で有効な証言はとれていません。しかし、調査で1人の人物が浮かび上がってきました。今、顔写真を張ります。彼は木村隆正。年齢はおそらく25歳。」

「おそらくとはどういうことだ？」

「それが…彼は十年前交通事故で死んでいるのです。戸籍も確認しました。警察内部の関係資料にも死亡と書かれていました。」

「なりすましている、または…」

「生きている可能性があるとのことですよ。彼はひき逃げされて死亡しました。検死が終わって、家族に死体が引き渡されたはずなのですが…。家族はまだ葬儀を上げてない…。」

「その死体が盗まれたと？」

「はい。そうするとこの事件は計画的犯罪とも考えられています。しかも木村隆正は秘密結社“セブン”の幹部であると噂されています。昨日、右翼の過激派と密会していたとの噂もあります。」

「厄介なことなりそうだな…。ここにいるのは100人。“セブン”の人数は200人、右翼の過激派は把握できない。人数が足りなさすぎる。」

「そうです。しかし、こちらには切り札があります。」

「それは？」

「ここにいる浜田夏樹です。彼女は“セブン”結成当初のメンバーであり、今回の右翼の過激派とも接触しています。心配には及びません。彼女はもう6年も警部としてやってきています。信頼できる部下です。」

「しかしな…潜入スパイとなると…失敗した時の首は誰がとるかということになる。」

幹部がざわざわし始めた。これだから上は…。山岸昇は心の中でぐっところえていた。今回殺されたのは自分の弟なのだ。イラつくのも無理はなかった。早く捜査をしたい。もしかしたら、警察に内通者がいるかもしれないのだ。その可能性があるために今回の事件は極秘事件となっている。上は警察関係者が犯人だとしたら、絶対に公表しないだろう。木田を調べていた…それだけは変わることのない事実だ。その捜査によって弟が何に気がついたのかは分からない。でも何かに気がついたに違いない。俺とは違い、天才だった。何よりも情報解析が恐ろしいぐらいまい。欠点は人がよすぎ、信じてしまうことだった。そのために厄介なことになったこともしばしばみられた。

「私がとります。」

「山岸君、君ひとりじゃすまないよ。」

「弟の仇が討ちたいんです。」

「…分かった。いいだろう。」

「藤井さん、しかし…。」

「俺が責任を取ろう。」

「藤井さん、ありがとうございます。」

「いや、彼はしっかりやってくれていた。頼んだよ。」

正文はテレビを見ていた。

「今夜未明、東京新宿で遺体が発見されました。警察の情報によりますと…。」

『ブチッ』

どうやら、警察は今回の件についてはもみ消すつもりらしい。情報が規制が行われるとしたら、こちらもうかつには動くことはできないが日常生活は普通にできる。指名手配されていたら動くことは難しいが、ていうか指名手配されているんだが10年前だ。全く顔が違ふ。おそらく大丈夫だろう。後は連絡を待つだけだ。

『プルプル』

「はい、もしもし。」

「決行日は1ヶ月後…。新宿でやるつもりだ。お前はあの役でいいんだな？」

「ああ、頼んだ。」

「うつ…」

くそっ…。発作か…。発作とはいっても痛みが大きい。薬を飲んではいるが、徐々に動ける時間が減ってきている。一日に6時間は寝ないとしんどくなった。病気なので仕方ないのかもしれないがもつと動かなくてはと思う。

しかし、今も外に4人警察の者が張り付いている。2人はおとりと

いうよりも分かるように配置している。心理作戦のつもりかもしれないがいつも覆面などを使っている警察が急にこんなことをしたら逆に警戒心が生まれる。

もちろん、それは山岸にも分かっていた。

「よいのですか？」

「ああ、心配するな。あれらはすべておとりだ。彼もそれは分かっているだろう。問題なのは彼が路地などに入った時だ。弟もそれでやられている。1人ではなく複数人をバラバラに配置することによって、彼がどこに行くかつきとめるだけの目的だ。まず、彼の目的が何か分らないと、逮捕する前にまた我々が後手に回ってしまう。いまは2人一組で動いてもらっている。そうすれば、1人が負傷してももう一人が動け、追跡がより確実になる。AとDで班わけをしているから覚えておけ。」

「はい。」

山岸はこれで彼の動きを封じ込められると思っていた。

「よお、正文。見られているな。」

「ああ、動きがとりづらい。」

「そこら辺は考えているよ。奴らはお前が1人で動いていると思っているみたいだな。お前が動いているときにいろんな奴が動いているということを知らないんだよな。」

「：民間人にセブンがいるっていうのは考えにくいんだろうな。」

「まあ、そういうことだから……。今から会議がある。最後だけな。後は個人がどれほど頑張るかにかかっている。」

「わかった。今から俺も出る。護衛を頼むよ。」

「大丈夫大丈夫。」

俺は普通に外に出た。鍵を閉め階段を下りる。捜査官を見過ごし、反対の道に行く。そこに…。

『ブーツ、ブーツ』

「うあー!!」

「こらあ、きをつけろ。どこ向いて歩いてんだ。」

「すみません。気をつけます。」

「頼むよ、ほんとに!!」

「こちら、A。木田を見失いました。」

「何だつて?どこに行ったか?」

「分かりません。」

「じゃあ、CとDにも応援要請を送れ。Bだけじゃ難しい。B、正文の追跡を行え。おい、B!くそっ!A!そっちからも追跡できないか?もしもし、A!応答しろ。」

「今連絡が入りました…。AとB、計四人が殺されました。木田は現在、どこにいるか分かりません。しかし、一度に4人も殺すことができるとは到底思えません。近くにセブンが複数人いると考えられます。あと、銃もすべて奪われました。全員が二丁持っていましたから全部で八丁。」

「…。畜生。」

俺は新宿を歩いていた。集合場所は前に歩いているジャンパーを来ている青年が先にある。俺たちは集合場所は常に変えるためにある

服を着ている人について行くという形にした。そうすれば、携帯などで本人が連絡を取らずに場所を変えることができる。

彼は中華のお店に入っていた。何か不穏な空気が立ち込めている。ここはよく、裏の人たちが使うお店だ。この店のオーナーは中国のマフィアではないかといわれている。

案内されたのは個室だった。見たことある隆正以外は3人いた。

「よお、正文。こっちに座れ。」

自分が思っていた以上にいろんな思惑が絡みそうだ。

先手

「さて、自己紹介から始めましょう。今回集まってもらったのはここにいる5人です。木田正文、木村隆正、正田学、真田正そして黒田正也。懐かしいメンバーですが、立場が皆違いますね。木田正文・殺人容疑で現在指名手配。私、木村隆正・10年前に交通事故で死亡。正田学・藤井組の幹部。真田正・警部。黒田正也・右翼の過激派幹部。皆、頑張ってくださいました。今のところ作戦通り。まずは警察のほうの話をしよう。正文を追っているで間違っていないか？」

「今のところは間違っていない。しかし、今回の事件でどうなるかは分からない。予想できるのは二つ。もっと大々的に捜査を行うか、今の状態で続けるかの二つ。」

「大々的にやるには証拠が少ないのではないか？」

「いや、少なくとも警官が四人も殺されれば動かざるを得なくなるのはわかるだろ。動くのは遅くはなるだろうが……。」

「分かった。連絡を緊密にしよう。次は少し細かい話なるが……。右翼の動向はどうだ？話に乗ってきそうか？」

「うーん、今は状況の把握段階かもしれない。幹部には話は通してあるが、真意を知りたいらしい。」

「そりゃあ、無理でしょ。」

「分かっているも知りたいのは事実。右翼は非常に大きな団体ではあるが過激派は少ない。たとえば行動を起こして過激派の組員が捕まれば、過激派はバッシングされ構成員は激減し……。後は言わなくても分かるよな……。」

「こつちも一緒だ。利益がどれくらい出るか、そして被害がどれくらい出るかということにかかっている。」

「被害はそこまででないだろうとは思っている。君たちも作戦の内容はもう話してあるだろ。俺たちは危険かもしれないが……。」

「そうだな。今からはいかに悟られないように運んで行くことが重要になるということは言うまでもない。」

「正文の言うとおり。今からが正念場だ。俺と正文で捜査を混乱させる。お前たちは作戦を実行してくれ。」

「分かった。」

「これからはガードはいらない。帰って注目を浴びることになる。」

「そういうことだ。じゃあ、解散にしよう。そろそろ警察が来るだろうからね。」

そうして俺たちは解散した。

7月21日、ある一つのビルが爆破された。そこに住んでいる人はほとんど助かったが、警察は2人の遺体を発見した。警察は2人の死亡をマスコミ各社に報道させたが、その2人が警部だったことは公にはしなかった。その発表は単なるガス漏れによるものだと説明したが、詳しいことは調査中としていた。警察は分かっていた。

「今回の事件は案外奥が深いのではないかと思っている。」

「山岸さん？」

「死んだのは警察関係者だけ……“セブン”は明らかに警察を狙って犯行を起こしているのではないか？どう思う……真田。」

「そう……ですね。言いにくいですが、もしあの爆破が人為でやられたものであるならば、狙いは警察関係者であると言いきれます。もっと民間人に被害が出てもおかしくない。むしろ出さないように計算した“セブン”のほうがすごいです。」

「お前、“セブン”からは何も情報がなかったのか？」

「私が任されているのは警察関係だけです。今回も山岸さんの指示通りのことしか話していませんし、それ以上のことは話していません。彼ら二人にわたった情報がどこから分かったもしくは発信源をいま、探っています。望みうすですが…。」

「そうか…。まあ、いい。今回が始まりなのがだれの目に見えても明らかだ。」

俺たちは重要なことを何か見落としているような気がした。

7月21日。正文は新宿を歩いていて。この間とは打って変わって笑顔があつた。

そこらへんにいる若者の笑顔とは違い獰猛な笑みに近いもの。しかし、彼によってくる女たちが多いのは事実。彼はそれを振り切り、交差点で待っている女に声をかけた。

「山岸恵さんですね。」

「はい。夫のことを聞かせてもらえるとということですね。」

「もちろんです。巷では俺が犯人ということになっていますがね。それはちよつと違うと言いたいのですね。」

「あなたの言っていることは理にかなっていますが、にわかに信じられません。」

「順に沿って説明しますよ。その襟についているマイクを外しましょうか。ブラジャーの中にも入れてるんですか？あまりいい方法ではないですよ？ここに来たらそれぐらいは予想しています。全部外してくださいね。警察関係者は引いてもらいましょ。まあ、俺

「が気にならなくなるほど大きな事件が起こるかもしれません。」

「それはどういう…。」

「行きましょう。あそこでよろしいですか？」

「はい。本当のことを話してください。」

「もちろんです。」

入ったカフェは若者でいっぱいだった。2人の雰囲気とはまるで違う。山岸恵は二の足を踏んでしまった。

「どうしました？」

「いえ、別に…。」

「以外でしたか？」

正文は少し笑っていた。案内されたところはちゃんとした指定席だった。彼が計画通りに事を進めているのがよくわかる。警察方から聞いていた。予想外に頭が回る。今も警察の方が見守ってくれているが…。

「どうしたのですか？警察の方がいないと不安ですか？」

「…。」

「黙ってしまおうと分かりますよ。」

トイレから彼女は出てきた。あの様子だとすべて外してきたようだ。風貌はかわいいというよりは美人。ここまで聞きに来たということは夫の死にかたに不信感を抱いている。そう断言できる。警察がすぐには来ることができない状況。自分が先手を取られている。明らかに不利。そういう場合は断ることもできる。相手は容疑者。手を出せば警察が動くことができる。わざわざ相手の思い通りに動く必要はないのだ。

「この状況でよく来てくれましたね。」

「私も夫の死には疑問を感じていましたから。ただあなたがいったことをうのみにするつもりはありません。」

「もちろんです。ご自分でお考えください。そんなに長くはなりませんから。」

「そんなことが……。」

「実際にあつたかどうかは分かりません。あくまで予想です。私が殺したわけではありませんから。これを渡します。」

「これは？」

「分かっているはずですよ。旦那さんの所持していた銃です。これを山岸昇さんに確認してほしいと思ひまして……。」

「分かりました。確認してもらいます。結果は後日……。」

「いや、こちらからご連絡します。3日後の7月24日の12時にご連絡しますので、結果を教えてください。今は警察もわずかしきありませんから、ばれていないでしょう。」

確かに少ない。一体何があつたのだろうか？ 恵は困惑を隠し切れずにいかなかった。

「代金は私がはらいます。10分したらここから出てください。警察の人もそれくらいには行動できるでしょう。」

「あなたたちは一体何をしようとしているの？」

「…あなたには分かる時が来るかもしれない。では、これで。」

「お久しぶりです。昇さん。」

「いえいえ、こちらこそ。恵さん。葬式にも出られずにすみません。」

彼女は少しやつれたように見える。それも無理もない。警察からもたらされた情報はわずかなはずだ。それは分かっているはずだが、身内にも厳しいのは最終的に首を絞めることになる。だからこそケアが大事なのは言うまでもないことだが、その役は親戚の俺に回ってくる。

「ところで、話とは？」

「これです。」

「これをどこで？」

「木田正文に渡されました。」

「警察はその行動に気付けなかったということですか…。分かりました。預かりましょう。」

「これは内密にしてください。この銃は夫が使っていたものだそうです。」

「それは！いや、しかし回収されたと…。」

「だから内密にということですよ。」

「彼はどうしてこれを？」

「分からないです。彼が何を考えているのか？でも私たちは彼らに先手を取られ続けています。」

「あなたは優秀な警部でした。参考にさせてもらいます。一刻も早く彼を逮捕して…。」

「違います。」

あまりの強い口調に俺は黙ってしまった。

「まずは彼らの目的を明らかにすることが重要です。彼らの目的を知ることができれば、予想を建てることができます。それにもう分かっているんじゃないやありませんか？こんなに報道規制がかかっているようでは分かります。」

「……。」

「慎重に調べてくださいね。昔もこういうことがありましたから…。」

俺は彼女に何も言うことができなかった。彼女は分かっていたのだ。全部。だったら俺がやることは真実を明らかにすることだけだ。

接触

7月24日

正文は名古屋駅を歩いていた。名古屋駅はたくさんの人が集まっていた。今日は何があつたのだろうか？よく見ると松坂屋の看板にバーゲンのチラシが貼つてあつた。これ目当てだろう。よく見るとカップルというよりは主婦の方が多いように見える。人通りが多いのは時には役に立つ。反対にその手の人だとばれることもある。名古屋には駅のだ真ん中に案内所がある。目立つた行動はできない。ついてきている奴がいるのは当然。雰囲気がつもと違う。わざとばれるように行動している。俺に接触したいと思っている証拠だ。俺は松坂屋の手前の角を曲がつた。ここならある程度人通りが少なくなる。特に今日は注目する人はいないだろう。そう考えているとその人が歩いてきた。身長は180センチ程度。体型は太つてはいない。かといって鍛えてないわけではないようだ。

「こんにちは。」

「こんにちは。木田正文さん。」

「その筋の人ですか？」

「いえ…。こんなところで話すのもあれですし、どこか喫茶店に入りませんか？」

「ええ。しかし、名古屋駅からは離れましょう。栄のホテルの近くにスターバックスがあつたはず。保険とするわけではありませんが、人がたくさんいるところにしてもらいます。あと、服装も変えられたら変えてください。いま、私はサラリーマン風にしていますが、そこにはサラリーマンの方が多いので…。よろしいですか？」

「何とかしましょう。集合は午後一時でよいですか？」

「はい。ではスターバックスで会いましょう。」

午後12時。山岸恵は電話の前にいたわけではない。昇さんに頼んでしまっているからできる限り注目されるような行動は慎んでいた。警察は可能性のあるホシや関係者は徹底的に調べ上げる。彼に接触した私は今のところ一般人の中では監視対象になっていることは言うまでもない。盗聴器なども仕掛けてはいないようだ。私がいたころは積極的だった気がする。10年も前の話なのだから変わっていても無理はない。

「プルップルルルルル」

「ガチャ」

「もしもし。」

「もしもし。私はこの間、損保のお話に伺わせていただいた、加藤といいます。先日件ですが、どうになりましたか？」

彼はどこかで私を見ていたようだ。そうでなければ金融業者が来たことも知らないだろうし、2日前に来たことも知らなければ先日と使うことはできない。うまいと私は思う。この会話では証拠にはならない。

「資料等でよく説明をしてくれましたので理解はできました。しかし、まだわからない事がありました。」

「それはどんなところでしょうか？応えられる範囲で答えさせていただきます。」

話は通じているようだ。昇さんが資料を見ながら説明をしてくれた。しかし、彼自身にも分からないことがあってその確認をとりたい。ということ隠した形で伝えたつもりだ。彼の言った答えられる範囲というのは盗聴をされている可能性が多いので返答はできないか

もしれないということだ。回りくどい話し方だがこうする他はあつて話す以外はない。それには危険が伴うし、2人自身監視が付きまとい動きづらくなる。

「それは死んだときの保証金のことなのですが…。資料には死亡した形によつて金額が変わるといふことなのですが説明いただけますか？」

「少し待つてもらえますか？」

「はい。」

「~~~~~」

もちろん、これは演技。資料はたくさんあるのですぐには答えられないものだ。分からない部分というのは死んだ形。即死ではないということだ。私に伝えられたものはピストルによつて頭を討たれ即死ということだったが、検死の結果は違ったということだ。

「え、それはこの間すべて説明していますね。もしよろしければご自宅にお伺いいたします。いつがよろしいでしょうか？」

「明日の昼とかいかがですか？」

「はい。大丈夫です。12時ごろに行きますのでよろしく願います。」

「いえ、こちらこそ何回もすみません。」

「いえいえ、こちらこそ。では、失礼いたします。」

「ガチャ」

彼が持っている情報はあれがすべてだったようだ。まだ、言っていないことはたくさんあるが、あまり長く話していると反対に疑われる心配が出てくる。あのぐらいがちょうどよかったと私は思った。

明日、結果が出るかもしれないと私はこの時思っていた。しかし、
重大な情報を見つけることになる。

警話

7月25日

昼には彼が来る。それまでに掃除・洗濯といけない。主婦のかなしい性ではないだろうか。そう思うと少し落ち込んでしまった。

「ピンポン」

彼にしては少し早い。危機感を覚えながらも誰が見張っているかわからないので、出ることにした。

「はい、どなたですか？」

「先日の加藤です。資料のご説明にお伺いさせていただきました。」

身なりでは判断はできないが背丈や体型は彼とよく似ている。

「今開けますので少しお待ちください。」

「カチャ」

「こんにちは。以前お話した加藤です。」

「そうですか…。私に何か渡しましたか？」

「そうですね。警察内部の資料をお渡ししました。」

彼は違う人だ。なんとなくわかる。これが警察に勤めていてどんなに大切かを知った。いわゆる第6感。体型的にも彼は武道に通じているのだろ。これからどうする？

「どうしました？」

「ヒュ」

わずかな風が通り過ぎた。その瞬間に彼の上体がぶれた。そして、私の前で倒れた。

「ドサッ」

「偽物まで用意するとは思いませんでした。いささか甘く見ていたようです。」

「久しぶりですね。木田君。」

「立ち話も何ですから、家に入りましょう。後よくないニュースがあります。12時ごろになったら分かると思いますが……。」

「？」

私は疑問を浮かべながら彼と一緒に入っていった。

「分かっているかもしれませんが、このことが誰かにばれています。それは簡単な問題ではないような気がします。あなたが接触した人間には怪しい人はいなかった。そして、この家にも監視カメラなどは一つもない。」

「それはそうかもしれないけど、どこからかばれたのかもしれないわ。盗聴器とかも最近は発達しているし、隠しているのかもよ。実際に今のこの行動もどこかで見られているのかもしれないわ。」

「それはない。」

「なぜ？」

「ずっとあなたの家を監視していたからだ。あれから10年。いや

あなたをと言ったほうがよいのかも。」

「何を言っているの？あなた、ストーカー？警察呼ぶわよ。」

「まあ、呼んでくれてもよいですが、話を聞いてもらいたいですね。」

「何の話かな？」

「あなたは警察をやめさせられましたね。」

「よくご存じで。」

「あなたは10年前の事件に関わっています。それは確実にあっているとは思いましたが…、どこまでかわっているのですか？」

「私もここまでだね。」

「何を？」

「ゲホゲホ。」

木目のリビングに赤い液体がみるみる広がっていった。

「こういうことでしたか。私に罪を着せるためにあなたは私と接触を続け、10年前のことについて話させると同時に我々の目的を聞き出そうとしたんですね。しかし、我々はそんなことでは止まりませんよ。ここにある起爆装置もすべて解除させてもらいました。勝つのは我々です。」

「ふつ、そんなに簡単にはいかないわよ…。」

「ドサッ」

また一人死んだ。

警察は何を考えているかは分かっているが手口が汚い。

ここで歩みを止めるわけにはいかない。

正文は携帯を開いた。

12時、俺は恵さんの家に着いた。重要な話があったからだ。彼女が狙われている可能性があるのが分かった。それは“セブン”ではなく身内である“警察”であつた。最近は多くの凶悪犯罪が増えていた。実際には報道規制が敷かれ、一般の人は知らないかもしれないが、裏の町では噂になつている。どれもこれも100人単位で人が殺されている。なぜ初めて見つけるのが警察なのはよくわからないが…。

それには特徴がある。殺されているのはお年寄りだ。特に身寄りが無かったり、もしくは1人暮らしだったり…。発見するのが遅れる

のは原因であるが、実際にはその遺族の人たちに報道規制を伝えるのが非常に困難なことになっている。

今の事件には関係ないかもしれないが、裏の世界では“セブン”の仕業だと言われているが、誰も実態を知らないのだ。

裏のさらに裏の世界にはびこっていることは関係者は知っていて、警察も知ってはいるが、跳ね返りが大きいことを懸念してあまり踏み込んでいない。

調べないことにはどうにもできないのだが、死ぬのは惜しい。そこで警察が頼んだのが“セブン”だった。裏の世界のドンと言われていた彼らはすべてのことをしりつくし、そして調べるのも得意ということで警察が依頼したのだ。

その金額によって今のような問題になったようであり、その金から“セブン”は今のような動きを見せているという。

そんなことより恵さんが危ない。

俺は家のチャイムを鳴らした。

しかし、反応がなかった。

いやな予感がする。俺は家のドアを開けてみた。

あいている。

俺は銃を準備した。

リビングに入った。

そこにはたくさんの血がたまっていた。

おそらくは生きていないだろう。

しかし、そこには死体がない。

俺は携帯を開いた。

7月29日

立て続けにテロがおこった。

もちろん、全く被害者は出ていないが、47都道府県ですべて起こっている、それと同時に“セブン”がそれぞれの都道府県に在住していることが分かった。警察はこれに対して警戒態勢をとった。あらゆるところで検問が設置され、“セブン”を確保しようと躍起になった。しかし、“セブン”の幹部は分かっているものの、一般人までは分かっているわけではない。構成人数は3000人を超えているという情報もある。

問題は幹部の七人のうちの一人が誰かわかっていないことだった。

「山岸恵は消されたのか？」

「ええ…。あの血の量では助かってはいないと思います。」

「調べることはできないのか？」

「調べるには多少なりとも犠牲が伴うかもしれませんが。無線ではあそここの家を“10年間”も監視していたようです。」

「分かった。引き続き取り締まりを徹底しろ。もし、捕まえたなら尋問しても構わん。この事態にはアメリカのほうも乗り気だ。テロがアフガンのほうにつながっていたら日本をまきこむことができる

からな。」

「そうですね。それだけは避けたいところですね。」

「ああ、もしかしたら10年前の真相を知っていたらまずいからな。まあ、そういうことだ。何が何でも証拠を見つけ、拘束しろ。それができなくてはアメリカのほうから派遣が来るだろうな。いやもう来ているのかな……。だとしたら、やばいことになっているね。」

ブルルルル

部屋に電話の音が鳴り響いた。

マスコミは困惑していた。なぜならすべての情報を公開する前に警察に届けなくてはならなくなったからだ。報道規制が厳しすぎる。これでは戦前のようにになってしまう。そう思っていたときに電話がかかってきた。

8月1日

ついに“セブン”の構成員が捕まった。

警察内で激震が走った。今まで構成員が発表されていない中でのこの逮捕は幹部であることは明らかであった。逮捕したのはメリファという外国人であった。捕まえたのは真田だった。これも警察関係者には疑問だった。一回裏切ってしまったらもう2度とその組には戻れない。警察内部は調べが終わったか、もしくはばれたかどちらかである。

「今から、会議を始めようと思う。今回は秘密捜査を大規模に行う。今ここにいるのはおよそ一万人。この重大さはご存知かと思う。作

戦はローラー作戦だ。」

この会議は午前1時から始まり、翌日の午前1時まで続いた。

8月2日、一万人を超える遺体が樹海で発見された。

ここで警察は重い腰を上げた。謎の集団が大量殺人を企てているということがマスコミを通じて発表された。

今までよかったはずの治安は最悪になった。何より一般人の暴徒化が急速に進んでいった。国際連合もこの状況を踏まえ、国連軍を派遣しようとしたが、一般人に隠れている犯罪者はさばきようがないということと中国、ロシアが拒否権を発動させようとしていたので、まずアメリカと韓国、そしてイギリスが名乗りを上げ日本の自衛隊と合流した。日本はこれに合意したが命は保証できないと発表した。

警察や自衛隊、多国籍軍によって治安は回復されたかに見えた。

8月15日、ここから悪夢の3日間が始まるとはだれも思わなかった。

8月16日

警察幹部が恐れていたことが起きた。それは広島に生物兵器が使われた可能性があるということだった。被害は20万人とも言われている。新型のインフルエンザを独自に改良したソ連の生物兵器である。従来のインフルエンザとは違い、感染して1日目で他の者に感染するようになり、40度を超える熱が5日間続く。

「広島は壊滅。自衛隊、警察ともに入ることができません。広島県を全域封鎖しています。今回の事件は警告です。先日起こったテロはすべての都道府県で起きています。それを踏まえたとはいえ……。」

「被害はどのくらいになりそうだ？」

「統計によりますと……7000万人です。」

「上村長官！いつからここへ。言ってくだされば迎えに行きましたものを。」

「いい。今は緊急事態だ。顛末は聞いた。おそらく相手は俺たちの謝罪を求めているのだろう。実際に今回ののもそこまで被害がひどいとはいえない。東京に巻いていたのであればおそらくこの10倍はなくなっているだろう。しかも地域封鎖を“セブン”行っていたというではないか。警察も形無しだな。」

「……。」

「今からは俺が直々に指揮を執る。まずは調査員を派遣しろ。岡山、鳥取、島根、山口から派遣し、そこからの結果を待て。他県には警戒態勢を敷き、この2日間の県外への移動を禁止する。」

「そんなことしたら経済が「人の命よりも経済が大事か？」

「……。」

「皆動け。」

ガタツガタツ

皆が退席した後で彼は笑みを浮かべていた。

正午、

「計画実行。各隊隊長の指示に従え。検討を祈る。」

山岸昇は各県の情報をまとめていた。実際にはセブンの情報なんて来ないのだが…。早い話が前の事件で取り逃がしたので捜査員から外されたのだった。警察をやめて単独行動をしようとも考えていたが各県への移動ができないのならやめるよりはここにいたほうが情報がたくさん集まるだろうことは簡単にわかる。

「息抜きでもするか…」

そついつて彼は玄関へ下りて行つた。

「恵さん？どうして…死んだはずじゃ…」

あの大きな箱は？まさか…。

「待て、その女。今すぐその箱から離れろ。」

玄関付近の警察官が固まった。

彼女は確かに笑ったように見えた。

彼女は携帯のボタンを押したところその箱から白い煙が出始めた。

警察とはいえ、皆命は惜しい。

我先にと逃げようと出口に向かう。

ついに警察自体が混乱し始めた。

そこに長官の命令が響いた。

「今外に出たら民間人に被害が及ぶ。全員中に入れ。外気になるべく入れ替えないように。」

それに合わせたように自衛隊がマスクをかぶった状態で突入してきた。そして出口を封鎖。警察関係者はここに監禁されることになった。

山岸は違和感を感じていた。まさに合わせたようだった。それに恵もここにはいない。

しかし、この日は他の県では動きはなかった。

その夜の犠牲者は2000人。熱を出しているものも含めると徐々に警察が機能しなくなっている。

山岸は必死に原因を探していたが証拠はなかった。

8月17日

自体が一変した。民間人と“セブン”が連合して県を乗っ取ったということだった。北海道、沖縄、鹿児島。この四県が事実上、確定

的だった。警察内部でもこれに対しても変化が出てきた。“セブン”に屈してでも民間人を守ろうとする派と正義を貫く派に分かれてしまった。長官は前者のほうに傾いていた。

そこに電話が入ってきた。木田正文が降伏を呼び掛け、こちらに向いてくるということだ。内部の対立が激しくなったのは言うまでもない。その状況を踏まえて電話会談ということになった。

正午。秘密裏に電話会談は行われ“セブン”に全権を委任することになった。

しかし、ここで事件が起こった。

木田正文が警察庁に来たのだ。

「何の用だ。」

「少しやりたいことができてましてね。どいてくれませんか、山岸さん。」

「そうはいかな。」

「言ってください。木田さん。我々が支援します。」

「真田。何言っているのか分かってるのか。」

「分かっていますよ。ここで足止めして内紛にでもしますか?」

「クソッ。」

「心配ですか…ならばこうしましょう。あなたと真田がそれぞれ警護に就けばいい。」

「それで構わん。」

「長官…。」

「要求していたのはほとんど我々だった。だからここでの話し合いは意味がある。山岸ここは押さえる。しかも、弟は我々が殺したの

だ。」

警察庁内部の人間は3割ほどになっていた。

「どういことですか？木田が殺したということになっていたはず…。なぜ今頃？」

「分からないか？俺たちが守っていたのは警察の威信ではない。守っていたのは生物兵器の流出を恐れただけのことだ。資料から発見したのはおそらく可能性だっただろうが彼の実績から見つけるのは明白だった。」

「そんなことのために…。あなたたちは一体何人の人を犠牲にしたら…。」

「もう遅い。これから話し合うのはワクチンだ。」

「話がお分かりになったようで楽です。もう別室で話しましょう。」

「少し待ってくれないか？山岸と話がある。」

「まあ、いいでしょう。」

「山岸、俺からの最後の頼みをきいてくれないか？木田も想定内だと思うが…。」

「しかし、そんなことは…。」

「木田は真のリーダーではない。それは真実だ。だからこそこのやり方が通用する。」

「……」

「警察を……。日本を頼んだ。」

「事件を整理しましょうか。」

「する必要はないだろう。」

「そうですね。これから日本に対する統治についてです。お読みください。おそらくこの通りになると思います。」

「カチャ……」

「恵さん……。どうしてここに……。来なければ……。」

上村が頭を下げた。

「すまなかった。しかし、秘密を守るにはこうするしかなかった。」

木田も頭を下げた。

「すまない。俺の父が迷惑をかけた。」

「!!!!!!」

「親子そろって屑が……。実の娘を殺し、まだ殺し足りないのか。私にとつてはお前らは死に値する。ここで死ね。」

「恵さんやめるんだ。」

「この2人を殺して何になる。」

「「黙れ」」

あまりの迫力に真田も山岸も押し黙ってしまった。

「復讐の連鎖はここで止める。いいな。親父。」

「ああ。7人でうまくやってくれ。」

「七人？どういう…」

2人は自分で持っているピストルを取り出して頭に当てた。

「やめろ」

「パキューン」

木田と上村はピストルの引き金を引いた。

譬話（後書き）

感想をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7792n/>

復讐

2011年1月19日15時54分発行